

珠洲は、起点だ。

はじめて珠洲を訪れた 2020 年の秋は、燃えるように真っ赤に染まった紅葉の里山のなか、田畑に点在する古い家々の、つやのある真っ黒な瓦屋根がキラキラときらめいていました。連なる瓦屋根の向こうには、ただ美しく透明な青い海が広がっていました。

映像制作会社の新規事業開発部門で、日本の地方部を起点にして、まだ国内外に知られていない日本の文化や暮らしの価値を紹介する事業を考えていた私たちは、いろいろな地方を回っていました。その中で最も魅力的で、かつ知られていない場所のひとつとして奥能登地域に出会いました。日本の中でもいち早く世界農業遺産(GIAHS)に選ばれたエリアでもあり、里山里海の自然と共生しながら伝統的手法を使いながらも生物多様性を維持する姿はとても美しく、よそ者の私にとってもとても魅力的に映りました。



奥能登の中でも最奥に位置する珠洲市は、行き止まりという特性からか奥能登地域の中でも最も純粋に古くからの街の姿を保っているところです。地方都市のロードサイドによくある中途半端なレストランチェーンもなく、ただ通過していただくだけの物流トラックもほとんど見かけませんでした。その一方で、江戸後期から明治にかけて栄えた北前船の寄港地でもあり、海運で儲けた船主や船問屋が豪邸を構えていたかつての豊かな町並みや文化が残る、まさに Hidden Gem と呼べる場所でした。私たちが珠洲を地方拠点にすることを決めた理由でした。



なにもない最果ての珠洲に、おなじように惹かれる人々は思った以上にたくさんいて、2017 年からは「奥能登国際芸術祭」が開催されたり、2021 年には東京の医薬品商社のイワキ(現・アステナホールディングス)が本社機能の一部を珠洲市に移転するなど、面白い人たちが集まってくる場所になっていました。若い移住者も多く、能登地域の中でも

芸術祭以降 100 人以上が移住してきたそうです。

珠洲には、余白がたくさんあります。新しいことを始める起点となる隙間がたっぷりあります。そこに暮らしてきた地元の人たちも、奥能登の中でも一番オープンで、私たちのようなよそ者に対してもとても寛容だと感じています。なので、その余白は外部と地域をつなぐ糊代のように働き、私たちが地域の方たちと緩やかなつながりをもてるようになるの

に、それほど長い時間はかかりませんでした。2023 年には引退競走馬の預託牧場「珠洲ホースパーク」を紹介するステートメントムービーを作り、ちょうど元旦に珠洲ケーブルテレビの番組で放映がはじまったところでした。そして、その日の夕方 16 時 10 分、震度 7 の大地震が珠洲を震源に能登半島全域を襲いました。



あの美しい黒瓦の町並みが、ほぼすべて瓦礫の山と化しました。美しい山々や海が、恐ろしい力で乱れ、崩れ、地面を押し上げ、人々の暮らしを一瞬にして破壊していきました。昔から住んでいた人も、新しく移住してきた人も、区別なくその日常を奪われました。幸い私たちの直接関わりのあった人たちは皆無事でしたが、ほぼ全員が住む場所を失いました。金沢や郷里に避難するひとたちも多く、いま奥能登にはほとんど人が住んでいない状態です。地震と津波の両方に襲われた場所を 2 月に訪れたときには、ただ破壊された街に、パトカーとカラスしかいませんでした。4 月になっても上下水道は復旧せず、8 割以上の世帯で水がないままです。



そんななかでも、珠洲に残って再起に向けて動き出している人たちがいます。珠洲ホースパークには 6 頭の馬がいて、彼らを震災後も毎日世話し続けながら、再開に向けてがんばる人たちがいます。家業を受け継ぎ、山の中の窯で高価な「菊炭」を焼いてきた炭焼きの人がいます。街にある公衆浴場の運営を引き継ぎ、新しいコミュニティの場を作ろうとしていた移住者の若者が、奇跡的に通じていた地下水を使い、浴場をいち早く復旧し、瓦礫を燃やして被災者や支援者のために毎日風呂を沸かしています。みな、もう一度、いまを起点にして未来を作ろうともがいています。

私たちにできることは何か？簡単には答えの出ることではないと思っています。しかし、いまこの瞬間の珠洲に、短期間でも滞在し、人々や馬たちと対話しながら、企業人として、これからの社会を共に生きる個人として、自分たちに何ができるのかを動きながら考えることはできると信じています。企業人材ではなく、社会人材として次の社会と一緒に作っていく起点となるために。

株式会社 TYO 事業開発本部 Third
Senior Executive Producer

岸本高由

